



中部大学春日丘高校 SGH課題研究

グローバル課題4領域について知り・気づき・探る学習**～ 国際ビジネス ～****I 取り組みの概要(3時間完了)**

- 講演とグループ討論：6月17日(土) 3, 4時間目 本校 東校舎2階会議室
外部講師：伊藤 健太郎氏(大垣共立銀行 調査役・海外ビジネスアドバイザー)
- 事後学習：6月20日(火)7限目

II 外部講師による講演

講演者である伊藤健太郎氏は、大垣共立銀行ホーチミン駐在員事務所に2015年まで5年間お勤めでした。講演では、近年の経済成長著しいベトナムの様子について、スライドを多く用いて分かりやすく解説をされました。

ベトナムの過去のイメージは、ベトナム戦争や枯葉剤など、暗いイメージが先行していましたが、最近では市場や食事やバイクといったイメージに変わり、暗いイメージはずいぶん払拭されているみたいです。ベトナムは人口9200万人で、街は活気にあふれ、特にバイクは1人1台と言って良いほど普及しているとのこと。バイクの主要メーカーがホンダということもあり、ベトナム人にとってホンダという言葉はバイクを表しています。日本メーカーの進出が著しく、日系企業もすでに2000社が進出しているそうです。また、スライドの中で電線や電話線の絡み合うベトナムの町中のスライドでは、「ビジネスチャンスがここにある」と、足りないものを埋めることがビジネスに繋がっていくとおっしゃっていました。大垣共立銀行のホーチミン事務所は、こうした現地で活躍する顧客のために様々なアドバイスをする、言わば水先案内人の役割を果たしているそうです。また、バイク社会のホーチミンは、公共交通のインフラ整備がまだ不十分であるため、渋滞緩和のために地下鉄の建設が進められているそうです。電車の車両はHITACHI社製が使われる予定であり、日本仕様の車両とは異なり、防犯上、荷物を置く網棚が設置されておらず、年中気温が高いのでヒーターを設置せず、つり革の高さも身長に合わせて低めに設定されているそうです。このような話の中で、生徒たちは国や文化が変われば、日本仕様のものは変更しなければならないということに興味を示していました。また、ベトナムでは日本食がブームとなっていることや、日本のマンガも流行していることなどを話され、生徒たちは大いに興味をかき立てられました。また、ホーチミン市の名前の由来である、独立の指導者ホーチミンについても歴史的な背景を踏まえつつ解説されました。

現在、ベトナムにいる日本人の数は、約1万5000人で、近年の日本企業の進出に伴い、家族でベトナムに移住する日本人が増加していることもあり、日本人学校の設立も増加し、その日本人学校も日本企業がほぼ無償で建設しているそうです。しかし、ベトナムで生活することは日本人にとって不安が常にあり、皆が協力し

合って生活しているそうです。

医療の発達していないベトナムでは、近隣諸国で医療行為を受ける人たちも少なくないが、そこにビジネスチャンスがあるかというところでもないそうです。裕福なベトナム人にとって、人間ドッグを受診するのにシンガポールへ行くようです。それ自体が社会におけるステータスであり、お金持ちのために病院を建設することが単にビジネスに繋がる訳ではないとおっしゃっていました。

現在、大垣共立銀行では、海外進出をする日本人や日本企業を積極的にサポートしているそうです。現地の情報提供や生活拠点の設置、現地でのビジネスマッチングや現地の銀行での口座開設など、お客様に対してありとあらゆるお手伝いをしているそうです。

そして、最後に5年間のベトナム勤務について、とてもプラスになる経験であったことを強調されました。5年間で培われたベトナム人との絆、共に働いた日本人駐在員との絆は実に貴重であること、そしてベトナムの将来性への期待、また海外に出て分かる日本のすばらしさなども説明されました。生徒たちには、将来海外に出る機会があるなら是非行って欲しい、迷ったら海外へと強く勧められました。



Ⅲ 事後学習

大垣共立銀行の具体的な企業の活動とその意義を学んだ上で、まとめの事後学習を行いました。「バングラデシュの緑豆を通じた貧困解消および生活改善」、「途上国における乳幼児の栄養改善」、「ボルネオ島での自然保全事業」、「災害発生時の物資の輸送」、「コーヒー生産を通じた自立支援」といったテーマ群から1つを選び、資料を用いて、他の班員にそれを伝えるという実践形式のまとめです。

事前学習も含めて、多岐にわたる事例に触れ、生徒は国際ビジネスの一端が理解できました。国内・国外を問わず、ビジネスとは需要があるところに生まれるものであり、その需要には相手の人々が何かを求めているかという視点が必要であることが理解できました。また、ビジネスを通じた海外支援も同時に行うことができることも実感できる学びとなりました。

Ⅳ ふりかえり（感想）

- ・自分をもっと知識を広げなければならぬと思いました。
- ・日本の企業や団体は自分が思っている以上に海外への進出支援を進めている。
- ・一つの問題に対して多面的に取り組むことで他国・他企業との連携を図ることが大切だと思った。

- ・ベトナムでは多くの日系企業が進出していることが分かりました。
- ・ただ工場を作るのではなく、その国の産業の事も考えなければならない。

事後学習資料例

企業の国際協力事例3 「サラヤ・ボルネオ」緑の回廊

■ 方針・姿勢

ボルネオ「緑の回廊」を作り上げると、野生動物は奥の保全林から海岸沿いまで、ひとつの緑の回廊を通じて、自由に自分の力で往き来できるようになる。そうすることで彼らの命はきっと繋がっていくだろうと考えたのです。



▲手を引かれるオランウータ

■ 概要

世界で3番目に大きい島、ボルネオ島は、3つの国からなる熱帯ジャングル。およそ1億年も前にできた貴重な自然には、多種多様な生命が息づいています。

アブラヤシは、この30年で生産量が爆発的に伸ばした植物。ここから取れるパーム油の約20%は洗剤や化粧品に。なんと残り約80%は食品に使われています。しかし、このアブラヤシの急速な生産量の拡大が、ボルネオ島の自然破壊につながっていたのです。

野生動物を救うため、サラヤが始めたのが「緑の回廊」計画を進めるボルネオ保全トラストの支援。このマレーシア・サバ州政府が認可したトラスト設立にはサラヤも参加した。分断された森の間の土地を買い戻し、回廊のように繋がれば、動物が繁殖する環境も戻ってくるはずです。プロジェクト開始から8年。これまでに28ヘクタールの土地を取り戻すことができました。

「現在ボルネオに『サラヤの森』といわれている『緑の回廊』が4号地まで取得できたんです。『緑の回廊』計画を達成すれば、完全ではないけれど、人間と野生動物が共生しながら、パーム油を作り続けるという道が、もしかしたら開けるかもしれないと思っています」



出典：なんとかしなきゃ！プロジェクトウェブサイト
出典：なんとかしなきゃ！プロジェクトウェブサイト